

アブラハムの歓待からイエスのもてなし
創世記 18:1-8

2026. 6. 7、庄和、NO. 775
春日部福音自由教会 山田豊

庄和会堂では、礼拝後にLSCが行われ、食事を共にする交わりが続いています。先月は、昼食会を持ったと伺いました。復活祭では「庄和のまごころ」としての出店があり、よい交わりがある皆様だと感じています。

本日は、アブラハムがマムレの櫪の木の下で、3人の旅人を迎えた物語です。これは新約聖書、そしてイエス様のおもてなしにまでつながる物語であることを、心に留めたいと思います。

子孫繁栄の祝福をいただいたアブラハムは、ヘブロンの方、マクペラの西の地、マムレに移住してきました。そこにランドマークとなるような櫪の木があったので、日差しのきついこの地では、よい日陰にもなったと思います。そこに3人の姿を認め、天幕に招き入れ、おもてなしをした、というのが本日のテキストのあらましです。水を持ってこさせて足を洗い、妻には上等な小麦粉でパン菓子を作らせ、自分で吟味した子牛を若者に渡して調理させました。デザートのためでしょうか、今でいうヨーグルトのようなものも用意しました。これらを3人の前に置いたのですが、新改訳聖書第3版では「彼らの前に供えた」と訳されています。アブラハムにとって、この3人は高貴な方と映ったのだと思います。9節以降の、サラに関する話や、ソドム、ゴモラの裁きを語る場面で、このうちの一人は主なる神であったことが明らかになります。あとの二人は、み使いだったのでしょうか。この3人に対するアブラハムの接待は、精いっぱいのおもてなしでもあったのです。

教会においても、このような心からのもてなしは、豊かな交わりを演出します。またそのもてなしは人に対してなされるのですが、主に対して行うような心が求められます(コロサイ 3:23)。

このアブラハムの歓待は、東方正教会において、三位一体なる神をアイコンとして描くことの象徴的な物語となっています。現在ロシアの美術館に納められているアイコン、「至聖三者」は、三位一体アイコンとして最高の出来栄であるといわれています。本物を見たことはありませんが、これをプリントしたものを見ると、神が私たちをご自身の交わりに入るよう招いているように感じます。アブラハムは屠られた子牛を出しましたが、テーブル上の皿に盛られた食べ物を見ると、イエスご自身が屠られた神の子羊として私たちのために差し出されていることに思い至るのです。実に、イエスのおもてなしによって、私たちは罪の世から救われて神との交わりに入れられ、平和を作るものとして生かされていることを知るのです。

引用聖句

コロサイ 3:23 何をするにも、人に対してではなく、主に対してするように、心から行いなさい。

マタイ 7:12 ですから、人からしてもらいたいことは何でも、あなたがたも同じように人にしなさい。これが律法と預言者です。

1ヨハネ 1:3 私たちが見たこと、聞いたことを、あなたがたにも伝えます。あなたがたも私たちと交わりを持つようになるためです。私たちの交わりとは、御父また御子イエス・キリストとの交わりです。

1コリント 11:24-25 感謝の祈りをささげた後それを裂き、こう言われました。「これはあなたがたのための、わたしのからだです。わたしを覚えて、これを行いなさい。」25 食事の後、同じように杯を取って言われました。「この杯は、わたしの血による新しい契約です。飲むたびに、わたしを覚えて、これを行いなさい。」